



# 水星交響樂團

## 第63回定期演奏会

2022年5月22日(日) 12:30 開場 13:30 開演

すみだトリフォニーホール 大ホール

# 水星交響楽団 第63回定期演奏会

指揮 井崎 正浩

イーゴリ・ストラヴィンスキー

## バレエ音楽「プルチネルラ」組曲 (約25分)

- |               |                               |
|---------------|-------------------------------|
| 1. Sinfonia   | 5. Toccata                    |
| 2. Serenata   | 6. Gavotta con due variazioni |
| 3. Scherzino  | 7. Vivo                       |
| 4. Tarantella | 8. Minuetto ~ Finale          |

バルトーク・ベーラ

## バレエ音楽「かかし王子」演奏会用組曲 (約25分)

- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1. 幕開け       | 5. 小川       |
| 2. 王女        | 6. かかし王子の踊り |
| 3. 森         | 7. 終結部      |
| 4. 王子の人形作りの歌 |             |

— 休憩 (約20分) —

ニコライ・リムスキー＝コルサコフ

## 交響組曲「シェヘラザード」 (約40分)

- 第1楽章 海とシンドバッドの船  
第2楽章 カレンダー王子の物語  
第3楽章 若い王子と王女  
第4楽章 バクダッドの祭り。海。船は青銅の騎士のある岩で難破。終曲

### 新型コロナウイルス感染拡大防止感染防止対策のご協力とお願い

- ◎発熱、風邪のような症状、体調にご不安がある場合は、ご入場の自粛をお願いいたします。
- ◎入場時に非接触型検温機（熱感知サーモセンサー等）にて体温を計測させていただきます。平熱より高い熱があるお客さまには入場いただけませんので、予めご了承ください。
- ◎入場時の消毒用アルコールによる手指の消毒、咳エチケットやこまめな手洗いにご協力をお願いいたします。
- ◎入場時より、施設内では適切なマスク（不織布マスクを推奨する）を鼻にフィットさせ正しく着用し、鑑賞中およびロビー、ホワイエでのご休憩時も着用してください。場内における会話や終演時のブラボー等の掛け声はお控えください。
- ◎バーコーナーをご利用の際は、黙食にご協力ください。
- ◎ロビーのソファ、ごみ箱を一部撤去しておりますのでバーコーナー以外でのご飲食はお控えいただき、ごみはお持ち帰りくださいますようお願いいたします。
- ◎出演者への花束・プレゼント受付は当面の間停止いたします。また終演後の出演者とお客様との面会は場所に問わず全面的にお控えください。入り待ち・出待ちも同様にお控えください。
- ◎新型コロナウイルス感染拡大防止のために、お客様の氏名・連絡先を、必要に応じて保健所等の公的機関へ提供させていただきます場合がございます。

## ごあいさつ

本日はお忙しいところ、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

今回のプログラムは、20世紀初頭にパリで一世を風靡した伝説のバレエ団「バレエ・リュス」に由来したバレエ音楽を集めました。水響では、2017年にも同じく「バレエ・リュス」にちなんだプログラム（サティ「パレード」、ルーセル「バッカスとアリアーヌ」、ストラヴィンスキー「火の鳥」）をとりあげていますが、今回の3曲は、よりストーリー性というか、物語（おとぎ話）の色彩が濃いテーマを題材にしているように思います。しかしながら、同じおとぎ話といっても、個性の強い3人の作曲家にかかると、全く表現の方法が異なっており、リハーサルを進めながら、いつも感心されました。

ストラヴィンスキーは、前述した「火の鳥」や「春の祭典」に代表される大管弦楽による絢爛豪華なバレエ音楽で世に出ましたが、今回の「プルチネルラ」は、うって変わって、小編成オーケによる古典的な仕立てになっています。とはいえ、技術的には奏者泣かせで、彼独特の語法に満ち溢れている大変な曲ですが……。

「かかし王子」は、後に作られた「中国の不思議な役人」のキャッチーな雰囲気とは少々異なり、バルトークとしては非常にロマンティックな曲想が特徴的です。「シェヘラザード」は今更説明するまでもないリムスキー＝コルサコフの代表作ですが、楽譜をみると作曲家による指示事項は意外に限定的で、あのゴージャスな音楽は演奏者の解釈にかなりの部分を委ねられていて、数多の名演が存在する所以は実はそんなところにあるということは大変な発見でした。

今回お招きした井崎正浩さんは、ハンガリー・ソルノク市の音楽総監督を長年にわたり務められ、ヨーロッパと日本各地のオーケストラで活躍しておられます。特に、今回の「かかし王子」演奏会用組曲は世界的にもほとんど演奏歴がないと思われ、ハンガリーでご活躍されているからこそようやく実現できたものと考えます。まさしく「人を得た」出会いになりました。水響とは初めての共演となりますが、また新たな一面を引き出しただけだと確信しております。

それでは、ごゆっくりお聴きください。

水星交響楽団 運営委員長 植松 隆治



## 水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴージュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。



第60回定期演奏会  
(2019年11月4日)



## 指揮者紹介

### 井崎 正浩



現在ハンガリーを拠点にヨーロッパ、そして日本各地で活躍を続けている指揮者。2007年よりハンガリー・ソルノク市の音楽総監督に就任し、同市に所属する音楽・文化団体及び施設を総括する重責を担っている。就任以来毎年ソルノク市立交響楽団の定期会員券が完売し、その反響と期待の大きさが伺えるだろう。2009年11月には同市響及び合唱団を率いた来日公演で大成功を収め、こうした活動から同年のNewsweek紙において「世界が尊敬する日本人~文化の壁を越え異国で輝く天才・鬼才・異才100人」の一人に選出され、また翌年発売の「音楽の友」誌3月号特集「いま、海外で活躍する日本人演奏家たち」においても海外で活躍する日本人演奏家として指揮者20名の中に選ばれ掲載される榮譽を得た。近年では2012年10月にロシア・ナショナル管弦楽団を指揮してモスクワでのデビューを果たし、また2013年3月にはベルリン交響楽団演奏会への客演も行い、こうした国際的な今後の活躍に期待が集まっている。

1995年第8回ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝。コンクール中の演奏を国立オペレッタ劇場総裁に認められ、同年同劇場でレハール作曲《メリー・ウィドウ》を指揮しセンセーショナルなデビューを飾る。これまでハンガリーの主要オーケストラ及びハンガリー国立歌劇場に次々と客演し、ソムバトヘイ市・サヴァリア交響楽団の芸術監督兼常任指揮者、ブダペスト・オペレッタ劇場客演指揮者などを歴任してその名を確立し、“5つの豎琴国際音楽祭”委員会からは才能と実績あるアーティストに贈られる「リラ大賞」を授与されている。

日本では1996年1月、東京シティ・フィルのニューイヤー・コンサートでのデビューを皮切りに、読売日響、日本フィル、東京フィル、東響、九響、セントラル愛知響等の主要オーケストラに次々と連続客演して定評を得る一方で、新国立劇場、文化庁主催オペラガラ、国際オペラコンクール in Shizuoka、での本選指揮、日本オペレッタ協会などにも活躍の場を広げており、この分野での手腕も高く評価されている。

1960年福岡市生まれ。福岡教育大学音楽科卒業、在学中に文部省派遣給費留学生に選出されオーストリア国立ウィーン音楽大学に学ぶ。東京学芸大学大学院作曲指揮法講座修了。これまでに指揮法を故安永武一郎、故遠藤雅古、伊藤栄一、湯浅勇治、故カール・エステルライヒャー、ギュンター・トイリングの各氏に師事。

日本指揮者協会・会員、東京指揮研究会・幹事、(株)コンサートイマジン所属アーティスト

## 「ハンガリーをぜひ体感して欲しい」

— 指揮者 井崎 正浩さんに聞く —

—井崎さんは福岡のご出身とのことですが、音楽との出会いや、指揮者になろうと思われたきっかけについて聞かせてください。

母が戦後、駅の近くでいつもクラシック音楽がかかっていたのを聞いて子どもに音楽をやらせたいと思ったそうで、ヤマハの音楽教室に通っていました。

最初はリトミックをやって、次の段階でピアノかエレクトーンか選ぶときに、いろんな音が出るからということでエレクトーンを選びました。ピアノを選んでは音楽の基礎を身に付けることができたのにも思っていたけれど、後から考えてみれば、エレクトーンでリズム感やコード進行を早いうちに体感することができたのは良かったです。

高校2年生のときに、富田勲さんのシンセサイザーによる「展覧会の絵」に影響を受けて、オーケストラの曲をエレクトーンで編曲してコンクールに出たら優

勝してしまって、それでクラシックを勉強してみないかと声がかかり、そこからピアノを勉強し始め、地元の教育大の音楽科に進みました。教育大学ですから授業は音楽の教師になるためのもので、自分としてはそれに物足りなさを感じていたところ、ドイツ語の先生から本格的に勉強したいならと留学を勧められ、文科省の給費制留学の試験を受けたらあっさり受かってしまって、ウィーン国立音楽大学に1年間留学しました。合唱指揮科に入ったものの、日本の教育大では指揮の勉強なんてほとんどしていなかったのも何もできなくて、指揮科の湯浅勇治先生に指揮の基礎を教えてくださいました。合唱指揮科でもオーケストラ指揮科や作曲科と一緒に授業だったので、オーケストラを指揮してみてその面白さに触れたのが指揮者になろうと思ったきっかけでした。

1年間のウィーン留学後、日本に帰って大学を卒業

し、東京学芸大学の大学院に進んで二期会の合唱団指揮者の伊藤栄一先生の指導を受け、指揮者として活動を始めました。

ーその後、ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝されたのが、ハンガリーとの出会いですね。

ブダペスト国際指揮者コンクールは3年に1度の開催で、1995年に出場したのですが、それは34歳のときで、35歳の年齢制限ぎりぎりでした。このコンクールはハンガリー国営テレビの主催で予選からずっとカメラが入ってテレビで放送されていました。後で放送を見ましたが完全にTVショーみたいになっていました(笑)。こっちは必死でしたが。

この優勝の副賞としてブダペストでハンガリーのオーケストラをいくつか振らせてもらったのですが、ウィーン留学時代にお世話になった湯浅先生の口利きで1996年1月20日にブダペスト・オペレッタ劇場の引越し公演の「メリー・ウイドウ」を振って、その翌日の1月21日は東京シティ・フィルのニューイヤー・コンサートを振りました。

そしてソムバトヘイ市のサヴァリア交響楽団音楽監督を1997年から3年間務め、その後ソルノク市の音楽監督に就任し、現在に至ります。

ーコンクールの優勝でハンガリーを活動の拠点にされたということですが、特にハンガリーに思い入れをお持ちだったんですか？

全くないです。思い入れはなかったけれど、縁があったんですね。でも、ウィーンに留学時代に復活祭の休暇にブダペストまで電車で楽譜を買いに行ったことがありました。日本の1/6か1/7の値段くらいで買ったので、東ドイツのライプツィヒのペーター版やブライトコップフのスコアを買い漁りました。

ーハンガリーという国や国民性について教えてください。

ハンガリー人は一言で言うと人懐こい。日本人に対するシンパシーもある、仲良くなると親の代からの親友のように接してくれますが、その代わり仲違いすると祖先からの仇(かたき)かのような扱いになります。ハンガリー人というのはインド北西部の民族がルーマニアの西の方に落ち着いた人たちなんですけど、日本語と共通性があると言われていて、水、塩はハンガリー語でも同じ発音なんです。塩気が足りないこと「シヨータラン」て言うんですよ。面白いことに、赤ちゃんのお尻の青い蒙古斑、これがあるのはモンゴル人の他、日本人とハンガリー人だけだそうで、人種的に近いのではないかとされています。

ーハンガリーは、バルトークを始め、偉大な音楽家を多く輩出していますね。

作曲家も多いけれど、どういう訳か指揮者が多いで

す。ショルティ、オーマンディー、ケルテス、ドラティ、ジョージ・セルなど名だたる指揮者がハンガリー出身です。

ー現在はハンガリーと日本両方で活動されていますが、どのような割合でしょうか？

大体年間8~9往復していますが、滞在期間は半々くらいでしょうか。ハンガリーだけだと埋もれてしまう、日本だけだとヨーロッパ的なものを感じられない。どちらにも偏らない今の生活がちょうどいいと感じています。

ーバルトークはハンガリーを代表する作曲家ですが、バルトークの「かかし王子」を演奏すると聞いたときはどう思われましたか？

バレエ全曲も振ったことありますが、編成が特殊(チェレスタ連弾など)なこともあってハンガリーでもあまり演奏されないの、「かかし王子?マジか?」と思いました(笑)。

バルトーク・レコーズ・ジャパンの村上泰裕さんに聞いたところ、バルトークの息子のバルトーク・ペーテルから、バルトーク自身が「これを今後は自分の最終稿として演奏して欲しい」と言った版があるということで、それを演奏してはと提案しました。バルトークが最終稿としたにもかかわらず演奏される機会がほとんどなく、日本では初演になると思います。

長くハンガリーで活動してきて、これがハンガリーの曲というものを体得してきたつもりなので、この曲を聴いてハンガリーを感じられたと言ってもらえるような演奏をしたいと思っています。

ーそのほかの2曲、「プルチネルラ」と「シェヘラザード」はいかがでしょう。

どちらもオケ内ソリストが活躍する曲ですが、プレイヤーがやりたいことと指揮者がやりたいことが合うとすごくいい音楽が生まれると思います。「プルチネルラ」は古典と近代のバランスをどう表現するかがポイントでしょうか。「シェヘラザード」は指揮者でこの曲が好きでない人がいたら会ってみたい、指揮者冥利につきる曲だと思っています。

ー水響とは初共演ですが、どのような印象を持たれましたか。

他のオケで一緒した方から話を聞いて、もっと「狭く、深く」という感じかと思っていましたが、音を出してみたら「若くて機動的」でした。瞬発力的なフレキシビリティがあって、アンテナを張っている感じがします。自分が振る棒から皆さんがイメージを膨らませて音にしてくれるのでリハーサルが楽しくて仕方ないです。何かやってやろうという雰囲気を感じるので、本番がとても楽しみです。

(聞き手 伊東 陽子)

# 楽曲解説

イーゴリ・ストラヴィンスキー

## バレエ音楽「プルチネルラ」組曲

### プルチネルラ？ぶるちねるら？Pulcinella？

プルチネルラって何だと思いますか？なんかかわいい感じ。お菓子かな？誰かの名前？

実は16世紀～18世紀頃にヨーロッパで流行した“仮面を使用した演劇（コメディア・デッラルテ）”に登場するストックキャラクター（お決まりの役・ピエロの起源という説あり）の1つです。このプルチネルラを主人公に取り上げて、20世紀初頭に作られたのが、本日お送りするバレエ音楽「プルチネルラ」です。どんな曲なのかな？語感みたいにかわいい曲？…と曲の解説に行く前に、作曲者のストラヴィンスキーについて少しお話ししましょう。

### ストラヴィンスキーとディアギレフ

ストラヴィンスキー（1882-1971）はロシアの大作作曲家です。特に有名な作品は、いわゆる三大バレエ「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」で、全て過去に水響で取り上げました。

実はストラヴィンスキー、本日の3曲目「シェヘラザード」の作曲者リムスキー＝コルサコフに作曲を師事しています。出会いは1902年の夏。当時のストラヴィンスキーはなんとサンクトペテルブルグ大学“法学部”の学生！（なぜ法学部？なぜ作曲家へ？などの説明は紙数の関係で省きますが、ストラヴィンスキーが65歳の時に書かれた自伝で詳しく語られています）。1905年秋頃から本格的なレッスンを受けるようになり、1908年に師がなくなるまで続きます。

ストラヴィンスキーの1908～1909年頃のオーケストラ作品として、「幻想的スケルツォ」「花火」などがありますが、これらがとある人物の目にとまり、出世作「火の鳥」が生まれます。その人物がディアギレフ（1872-1929）。ストラヴィンスキー生涯の大親友です。実はこの人、最初は作曲を志し、リムスキー＝コルサコフに作曲を師事（ストラヴィンスキーと同じ！）していたのですが、「君あまり向いてないよ」と言われ作曲は諦めるのです。しかしその後が凄い。総合芸術プロデューサーとして大活躍。音楽以外では「芸術世界」という雑誌の刊行（1898-

1904）が有名ですが、その後、演奏会やオペラの興行を企画・実現、1909年にバレエ・リュス（ロシアバレエ団）を旗揚げます。そして注目していたストラヴィンスキーに「火の鳥」の作曲を依頼、1910年に初演され大成功をおさめます。その後1911年「ペトルーシュカ」1913年「春の祭典」とストラヴィンスキーの代表作がバレエ・リュスの舞台上で次々発表されていきます。



（2013年筆者撮影）

大親友だったストラヴィンスキーとディアギレフ。二人ともベネチアのサンミケーレ島に眠っています。

ちなみにこのディアギレフとバレエ・リュスの周辺人物を何人か挙げてみましょう。

作曲家：ストラヴィンスキー／ラヴェル／ドビュッシー／プーランク／サティ／プロコフィエフ等

振付師／ダンサー：

ミハイル・フォーキン／ヴァーツラフ・ニジンスキー／アンナ・パブロワ等

舞台美術：ピカソ／マティス／マリー・ローランサン  
ミロ等

その他：ジャン・コクトー／ココ・シャネル等

これでも全然書ききれないのですが、歴史上の大人物ばかりです。

そして本日お送りするプルチネルラ、1920年にパリで初演されるのですが、その舞台美術は、なんとあのパブロ・ピカソが担当しています。ではプルチネルラのどうやって作られていったのでしょうか？

## プルチネルラ誕生秘話

構想したのはディアギレフ。彼はペルゴレージ（1710-1736）をはじめとするイタリアの古い作曲家に興味を持っており、1916年頃からイタリア各地への旅行中（ちなみにディアギレフは1918年にナポリ公演を実施、その時ストラヴィンスキーとピカソも同行。ストラヴィンスキーの自伝には、ナポリの街をピカソと楽しく散歩する様子が書かれています）、各地の図書館で作曲家の自筆譜を収集、後に大英博物館にあるものも加え、これらの譜面を“素材にして”、新しいバレエ音楽を作ることをストラヴィンスキーに提案します。

実はストラヴィンスキーもペルゴレージ大好き・大尊敬していたため、喜んで作曲に取り掛かります。

ここで1つ、上記“素材”について。実はこの「プルチネルラ」、主なメロディーはペルゴレージやドメニコ・ガッロなど、イタリアの古い作曲家の作品のものがほぼ“そのまま”使われています。素材の料理の仕方についてはストラヴィンスキーも悩んだようですが、選んだ方法は素材の良さ（原曲を聴けば分かりますが、素晴らしい曲ばかり！）を生かす方法。これについては色んなことが連想されます。パロディー、オマージュ、本歌取り（和歌において古い元歌（本歌）の語句や趣向を採り入れて作歌すること）、ヒップホップのサンプリング etc. 悪く言えばパクリ・盗作。これに関して、音楽学者 岡田暁生さんの論文「独創としての編曲—ストラヴィンスキー＜プルチネルラ＞の詩学—」の一節を引用します。

「～ 旋律やバスや和声構造といった、曲の「構造」に関わる部分にはストラヴィンスキーは驚くほど手を入れていない。それでは一体『プルチネルラ』の独創性はどこにあるのだろうか？～つまり彼が『プルチネルラ』でおこなっているのは、「演奏領域の作曲化」ともいべき実験なのであって、ストラヴィンスキーはここで、自分の作曲上の独創を発揮する次元を、これまで作曲ではなく解釈の領域だとされてきた分野に大幅に引き移しているのである。～」

プルチネルラが、昔の作曲家のメロディーをそのまま使っているにもかかわらず、20世紀のストラヴィンスキーの作品としての魅力に溢れているのは、

ストラヴィンスキーが原曲に施した、編曲（色々な楽器による色彩感、リズムや音の強弱のメリハリ感、等々）の素晴らしさ・職人芸に秘密がありそうです。

ストラヴィンスキーの自伝からも一箇所引用します。

「～ 続く数ヶ月を私はひたすら『プルチネルラ』の作曲に捧げた。その仕事は私を喜びで満たしていた。私が手許に持っていたペルゴレージの素材、つまり多数の断章、未完に終わった、あるいは草稿がなんとか書き始められるだけの作品の断片、アカデミックな編集者の選別から幸運にも逃れたそれらの断片は、しだいにその音楽家の本当の性格を私に感じ取らせ、彼との精神的な、またいわば感覚的な親近性をつねにいっそうはっきりと私に認めさせてくれた。～」

## ストーリー

ストラヴィンスキーの自伝によると、「そのバレエの主題は、プルチネルラの恋の冒険の多数の伝承を取めた選集から取られていた」とあります。イタリアの昔話が元になっているということでしょうか。そのストーリーは大筋に違いはないのですが、細かい部分の解釈は色々あるようです。筆者は映像で3つのバージョンを観たことがあるのですが、全て微妙に筋が（場合によっては登場人物も）異なります。以下あらすじは Wikipedia より。

### <あらすじ>

町の娘たちは皆プルチネルラに惚れており、プルチネルラの恋人であるピンピネルラはそのことでプルチネルラと喧嘩になる。

プルチネルラに嫉妬する町の若い男たちはひそかにプルチネルラを殺す。しかし実際にはプルチネルラは死んでおらず、フルボに自分の扮装をさせて死んだふりをさせる。人々はプルチネルラの遺体を見て嘆くが、そこへ魔術師に化けた（本物の）プルチネルラがやってきて、（にせの）プルチネルラを生き返らせる。

プルチネルラを片付けたと思い込んだ男たちは、意中の娘をものにするために自らプルチネルラに変装してやってきたためにプルチネルラだらけになって混乱するが、最終的に正体のばれた男たちは娘たちと結婚し、（本物の）プルチネルラもピンピネルラと結婚する。

ドタバタ劇で、最後はめでたしめでたしの大団  
団。練習をみていただいた長田先生曰く「まるで吉  
本新喜劇」。

## 各曲解説

本日お送りする組曲は、バレエ音楽全曲の中から 8  
つを取り出した組曲です。みんな素敵な曲ばかり。

### 1. Sinfonia (Overture)

明るく楽しげに、かつ格調高く始まる序曲です。  
これからどんな物語が始まるのだろうか？とワクワク  
させます。

原曲：ガッロ「ソナタ第 1 番第 1 楽章」

### 2. Serenata

いわゆるセレナーデ。恋人の為に窓下などで演奏  
される曲。オーボエが奏でる哀愁に満ちた抒情的な  
メロディー。舞台では、町の男たちが意中の娘たち  
へ愛を歌いあげます（でも娘たちはプルチネルラに  
首ったけ…）。

原曲：ペルゴレージ「オペラ“フラミーニオ”よりア  
リア＜子羊が草を食むあいだ＞」

2 曲目と 3 曲目は続けて演奏されます。

### 3. Scherzino

愛の告白がうまくいかなかった男たちを揶揄うよ  
うな、また町の人々の楽しい様子を表しているよう  
な曲。後半で少しゆったりとした旋律になりますが、  
最後はファゴットの急ぎたてるような独奏で終  
わります。

3 つの部分 (3a/3b/3c) が続いて演奏されます。  
原曲：3a「ソナタ第 2 番第 1 楽章」3b「ソナタ第 2  
番第 3 楽章」3c「ソナタ第 8 番第 1 楽章」

(物語としては、3 曲目と 4 曲目の間で、嫉妬した男  
たちがプルチネルラを殺すけれども、実は死んでは  
おらず、、、そして 4 曲目で生き返りドタバタ劇が続  
きます。)

### 4. Tarantella

タランテラというのはナポリの舞曲のことで、語源  
は蜘蛛のタランチュラ。タランチュラに噛まれると  
毒の苦しさと踊り狂うように死んでしまう様を表現  
したという説もあるようです。テンポの速い難曲で  
す。

原曲：ヴァッセナール「協奏曲第 2 番」

### 5. Toccata

アレグロの愉快的な主題がトランペットで奏されま  
す。

原曲：モンツァ「ハーブシコードのための現代的組  
曲第 1 番より第 1 楽章」

### 6. Gavotta

変奏曲が続く古風なガヴォット（舞曲の 1 種）。メ  
ロディーはオーボエからフルートに移り、ホルンが  
加わります。

原曲：モンツァ「ハーブシコードのための現代的組  
曲第 3 番よりガヴォット」

### 7. Vivo

トロンボーンとコントラバスの掛け合いで始ま  
る、ユーモラスな曲。

原曲：ペルゴレージ「チェロと通奏低音のためのシ  
ンフォニアより終楽章」

### 8. 8a.Minuetto ~ 8b.Finale

町の男たちと娘たち、プルチネルラとピンピネル  
ラはそれぞれ愛でたく結ばれてメヌエットを踊り、  
最後の大団円へ。しっとりとした心に沁みるような  
旋律のメヌエットのあと、最後は華々しいフィナー  
レで幕を閉じます。

8a と 8b は続けて演奏されます。

原曲：8a ペルゴレージ「オペラ“妹に恋する兄”より  
アリア＜可愛らしい瞳よ＞」 8b ガッロ「ソナタ第  
12 番第 3 楽章」

## 新古典主義

ストラヴィンスキーは、その生涯で住む国を何度  
も変えています。ロシアに生まれ、革命後はスイス  
やフランス、最後はアメリカに移住。そして、その  
作風も何回も変わります。「春の祭典」に代表される  
原始主義音楽、「プルチネルラ」から始まる新古典主  
義音楽、アメリカに渡った後の 12 音技法音楽、晩年  
はたくさんの宗教曲を作ります。

では「プルチネルラ」が代表的と言われる新古典  
主義音楽とはどんなものなのでしょうか。簡単に言  
うと、ワーグナー、マーラー、ブルックナーなどの  
長大な後期ロマン派などの反動等から、古典回帰を  
目指してバロック的な形式や軽快さを重視、主観で  
はなく客観性を重んじた音楽です。

言葉で表現するとなんか難しいですが、聴いて感  
じる印象は「分かりやすく楽しい！」



バレエ・リュスの初演は大成功、ストラヴィンスキーの音楽もピカソの舞台美術・衣装も大評判だったようです。その後何度も再演されました。

キュートでコミカルでカラフルな、ストラヴィンスキーの傑作です。存分にお楽しみください。

(野口 秀樹)

参考文献：

ストラヴィンスキー「私の人生の年代記」

宗像喜代次・河野保雄「音楽とは何か<ストラヴィンスキー論>」

遠山一行「辺境の音 ストラヴィンスキーと武満徹」

岡田暁生「独創としての編曲—ストラヴィンスキー<プルチネルラ>の詩学—」

バルトーク・ベーラ

## バレエ音楽「かかし王子」 演奏会用組曲

～完全攻略！！「かかし王子」のすべて～

1. 基本編 —まずは段取りを押さえよう—

演奏時間は約 25 分。7つの小曲からなりますが、切れ目なく通して演奏されます。

	サブタイトル	曲想
1	幕開け	厳かに始まり、徐々に盛り上がる
2	王女	クラリネットの長いソロ
3	森	低音弦楽器の不気味なざわめき。次第に荒れ狂う
4	王子の人形作りの歌	軽快な行進曲
5	小川	オケ全体のうねりとサクスの民謡調の歌が交互に出現
6	かかし王子の踊り	木琴の乾いた響きや管楽器の鋭いアクセントが耳につく、ぎくしゃくしたポルカ。全曲でいちばん盛り上がる
7	終結部	夢から覚めるのを惜しむように静寂に戻っていく

もともと一幕もののバレエ曲（約 60 分）から作曲家自身が抜粋したのですが、音楽的な流れを重視したためか、順番が入れ替わっていたり、物語の肝

心な部分がわりと大胆にカットされたりしています。抜粋前の全体のストーリーは後述します。ストーリーを知ることによって曲を何倍も楽しく聴くことができると思います。

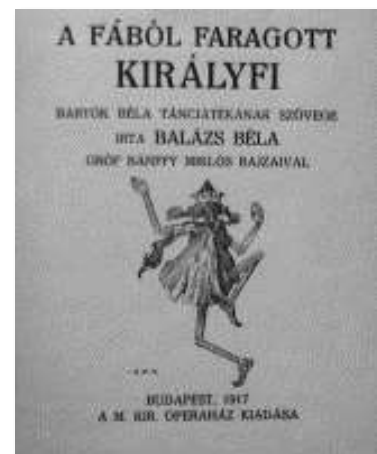
オーケストラはいわゆる 4 管編成（管楽器が原則 4 本ずつ）に、チェレスタ、ハープと各種の打楽器が加わる大規模なもので、なかでも 5 曲目「小川」で悲しげな旋律を歌うサクソフォンが印象的です。

それから特筆すべきは、異様なまでの楽譜の細かさです。スコアはどのページも音符で埋めつくされて真っ黒。弦楽器などはプルト（1 プルト＝2 名）ごとに楽譜が違う\*1という念の入れようで、バルトークの偏執狂的な一面がうかがえます。

2. 鑑賞編 —物語を理解して聴いてみよう—

登場人物は、若い王女、若い王子、妖精、かかしの 4 人。このほか、「森」や「小川」を表現する多数のダンサーが必要です。

かかしとは、王子が王女の気を引くために、王族の象徴とも言うべき杖（王笏）、マント、王冠などを使い、自分に似せて作った人形のこと。原題 A fából faragott királyfi（ハンガリー語）は、直訳すると「木を彫って作った王子」であり、畑に立つかかしの意味はありませんが、木の棒を細工し、パーツを取り付けて人間に似せるという意味では、「かかし」は訳語としてピッタリです。

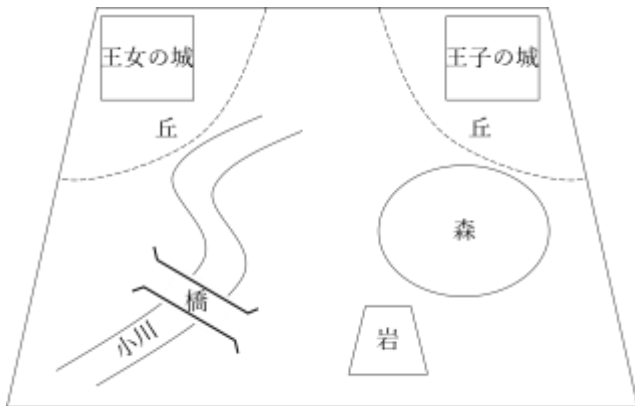


初演時の台本。

かかしのイメージがわかる。

\*1 通常、弦楽器群はヴァイオリン 2 パート、ヴィオラ、チェロ、コントラバス各 1 パートの計 5 パートに分かれているが、この曲ではヴァイオリンだけで 16 パートに分かれ (32 名)、同様にヴィオラが 6 パート (12 名)、チェロが 5 パート (10 名)、コントラバスが 4 パート (8 名)、計 31 パートに分かれている。つまり、弦楽器だけで 31 種の楽譜が存在することになる。

では、下記のような舞台のイメージを頭に置いて、全曲版スコアに記されたストーリーを追いながら音楽を聴いてみましょう。



下の表では、本日演奏される部分を太字にし、【】内に演奏順（前掲の表の番号）を記してあります。【4】と【5】の部分だけ、順番が入れ替わっているので注意してください。「第○の踊り」というのは、スコアに記されたバレエの見せ場で、曲を聴く上ではあまり意味はありません。

	ストーリー
	<b>【1】妖精が左の丘のふもとにいる。王女が森の中に座っている。</b>
第1の踊り	<b>【2】王女が踊りだす。妖精が小川を越えて森に入っていく。</b> 王子が城から現れると、それを見た妖精は王女に戻れと命じる。王女はしぶしぶ妖精の言うことを聞き、橋を渡って城に戻っていく。 王子は城に戻る王女の後ろ姿を見て、一目惚れ。「彼女のところに行く！」しかし王子が森のところまで来ると、妖精が森に魔法をかける。
第2の踊り	<b>【3】森が命を与えられ、不気味にうごめき出す。王子はおびえながらその奇跡を見つめているが、やがて敢然と森に挑む。王子はこの試練を乗り越え、森は落ち着いていく。続いて王子は橋へと向かう。</b>
第3の踊り	<b>【5】</b> しかし妖精が、今度は小川に魔法をかける。流れがせり上がり、橋を持ち上げる。王子は橋を渡れない。王子は落胆して引き返す。すると波は収まる。その隙を見て王子は橋を渡ろうとするが、すぐまた波が激しくなり、引き返す。何度か波に立ち向かうものの、王子はこの試練を乗り越えられず、絶望する。

	<b>【4】王子はしばらく座り込んでいたが、ある考えが浮かぶ。杖（王笏）を取り、マントを掛けられるよう、杖に細工を施していく。作業が終わると王子は岩に登り、マントを掛けた杖を王女の城に向けて掲げる。</b>
	王女は関心を示さない。王子は、その杖に王冠を取り付け、再び掲げるが、これもだめ。ついには自分の金色の巻き毛を切って、杖に取り付け、また掲げる。王女は「これなら欲しいわ」と、城から出てくる。王女が杖（以降「かかし」といいます）のところに着くと、王子本人がその後ろから姿を見せるが、王女はみすぼらしい若者を気味悪がって近寄らず、あくまでかかしを得ようとする。すると、妖精がかかしに魔法をかける。かかしが命を与えられる。
第4の踊り	<b>【6】王女はかかしを捕まえる。うれしくてたまらず、かかしと踊りだす。</b> 王女とかかしが踊りながら舞台裏へ消えると、王子は絶望して地面に倒れ伏す。すると妖精が森から出てきて、王子を慰める。妖精は魔法の言葉とともに、大きな花から金色の巻き毛、王冠、マントを取り出し、王子を飾る。王子は城へと凱旋する。「ここにあなたは万物の王になった」
	突然、舞台裏から、王女とかかしが現れる。かかしは手足が不自然にねじれ、巻き毛、王冠、マントが斜めに引っかかっている。
第5の踊り	王女はかかしを必死に踊らせようとするが、かかしの踊りはどんどん乱れていき、ついに王女はかかしを放り出す。かかしは地面に倒れる。すると王女は、光り輝く王子が森の向こうに立っているのを見つける。
第6の踊り	王女は艶っぽい踊りで懸命に王子を誘うが、王子は拒否する。
第7の踊り	王女はそれでも王子のもとに行こうとするが、妖精がまたもや森に魔法をかけ、王女の行く手を阻む。王女は森に勝てず、絶望して引き下がる。
	戻る途中で王女はかかしにつまづき、怒ってそれを蹴飛ばす。取り乱して王冠とマントを捨て、巻き毛の髪まで切り落とし、泣き崩れる。すると、目の前に王子が現れる。王女は髪がないのを恥ずかしがるが、王子はかまわずに王女を抱きしめる。
	<b>【7】すべてのものがゆっくりと元の形、元の場所に収まっていく。</b>

さて、このおとぎ話のような物語に寓意があるとすれば、それは「美しいものを美しいという理由で愛しているうちは、それは真の愛ではない」「失ってみて初めて、真の愛に気づく」といったことになるでしょう。

「かかし王子」とはまったく脈絡ありませんが、筆者はこのストーリーを知ったとき、リュッケルト<sup>\*2</sup>の詩にマーラー<sup>\*3</sup>が曲をつけた歌曲集のうちの1曲「美のゆえに愛するのなら (Liebst du um Schönheit)」がふと心に浮かびました。

私がきれいだからというのなら、  
愛してくれなくていいわ。  
おひさまでも愛していて。  
おひさまは輝く金色の髪を持っているわ。

私が若いからというのなら、  
愛してくれなくていいわ。  
春でも愛していて。  
春は毎年若いままなのだから。

私がお金持ちだからというのなら、  
愛してくれなくていいわ。  
人魚でも愛していて。  
人魚はきれいな真珠をたくさん持っているわ。

愛そのもののゆえというのなら、  
どうぞ私を愛して。  
いつまでも愛して。  
私もあなたをいつまでも愛するわ。

さらに、この台本を書いたバラージュ<sup>\*4</sup>としては、登場人物（かかし）が感情を持たないという非登場人物的な使命を課されること、一方で舞台上の情景（森や小川）が感情を持ったかのように動いて登場人物化することで、「登場人物と舞台上の情景を均質化させる」という、演劇理論上の試みを実践する狙いもあったようです<sup>\*5</sup>。

### 3. 情報編 ー周辺情報で知識を豊かにしようー

1912年、ブダペストでバレエ・リュスの公演があり、演目にストラヴィンスキーの「ペトルーシュカ」<sup>\*6</sup>が含まれていて評判となりました。歌劇場の支配人バーンフィ伯爵もこれに興味を持ち、同様のバレエ作品が欲しいと言い出して、バラージュとバルトークのコンビに委嘱し、1917年に初演されたのが、この「かかし王子」です。

ストラヴィンスキーに3大バレエがあるように、バルトークにも「かかし王子」を始めとする3大舞台作品があります。ただ、残りの2つ、「青ひげ公の城」はオペラ、「中国の不思議な役人」はパントマイム音楽と、舞台の形態が3つとも異なります。

私たち水星交響楽団は、「役人」を2007年に演奏しました。あと「青ひげ公」をやればバルトークの舞台作品をコンプリート、ということになります。2017年にストラヴィンスキーの3大バレエをコンプリート、2019年にマーラーの交響曲をコンプリートするなど網羅癖のある水響のこと、「青ひげ公」も早晚プログラム案の俎上に乗ることになるでしょう。

最後に、本日演奏する「演奏会用組曲」の成り立ちについて。バルトークは、バレエとしてではなくコンサートで演奏するためにと、全曲から抜粋して1924年に短い組曲、1932年には長めの組曲を作りましたが、ともに満足のいく出来でなかったためか、出版に至りませんでした。しかし、バルトークの子息であるバルトーク・ペーテル氏や、氏と交流のある村上泰裕氏らの努力で、「バルトークの最終意思」である組曲が先年出版されました。これが今日演奏する「演奏会用組曲」で、確認した限り本邦初演となります。ハンガリーとバルトークに造詣の深い井崎さんのご指導も得て、日本のバルトーク演奏史に水響が名を刻むこと、たいへん誇りに感じています。

(横地 篤志)

\*2 フリードリヒ・リュッケルト (1788-1866)。ドイツの詩人、東洋学者。

\*3 グスタフ・マーラー (1860-1911)。オーストリアの作曲家、指揮者。

\*4 バラージュ・ペーラ (1884-1949)。ハンガリーの映画理論家、作家。

\*5 岡本佳子「バラージュ・ペーラによる人形劇と舞踊の議論－『劇』(1917年)と『ドラマツルギー』(1918年)を中心に－」(『スラヴ学論集』第20号、2017年4月、pp.159-175)を参考にした。

\*6 「ペトルーシュカ」は、人形劇の人形が人間の感情を持ってしまったために苦しむ物語。

ニコライ・リムスキー＝コルサコフ

## 交響組曲「シェヘラザード」

村上春樹の作品に「シェヘラザード」という短編小説がある。村上春樹といえば「ノルウェイの森」「ダンス・ダンス・ダンス」「海辺のカフカ」といった長編小説が有名だが、短編小説も数多く執筆しており、「シェヘラザード」は2014年に発売された「女のいない男たち」という短編集に収録されている。なお、この短編集の1作品目には、最近米アカデミー賞で2009年の「おくりびと」以来となる国際長編映画賞を受賞した「ドライブ・マイ・カー」の原作も収録されている。

この小説は、一人暮らしの男性のもとに通う世話役の女性が、毎晩不思議な話を聞かせてくれる話で、この男性は女性は何者かを詳しく知らず名前すら知らなかったため、毎晩不思議な話を聞かせてくれるというところから、勝手に千夜一夜物語の王妃と同じ「シェヘラザード」と名付けた。ちなみに、この小説に出てくる「シェヘラザード」が語った話の内容は千夜一夜物語とは一切関係がない。

話はそれるが、私は村上春樹の作品が好きで、長編から短編、翻訳作品まで拝読している。彼の作品にはよくクラシックの名曲が登場する。しかも物語の大きな鍵を握った形で。例えば「海辺のカフカ」にはベートーヴェンの「大公トリオ」、「1Q84」ではヤナーチェクの「シンフォニエッタ」。1Q84のシンフォニエッタなんて、物語の冒頭で主人公が乗っているタクシーで流れたり（小説の始まり2文目で曲名が登場する）、自由が丘のレコード店でシンフォニエッタのレコードを探したり、小澤征爾指揮のシカゴ交響楽団のレコードを聴いたり、と完全に物語の一部になっている。まるで、大晦日のNHK紅白歌合戦で最後に合唱する「蛍の光」のように。

村上春樹はこれくらいにして、曲紹介に入る。

リムスキー＝コルサコフ（1844-1908）といえば、ロシアの大作曲家だ。ロシア芸術音楽の世界は、ミハイル・グリンカによって大きく推進された。それは、単にグリンカといういわばロシアが生んだ初めての才能ある作曲家の業績を誇りとするだけではなく、グリンカによって切り開かれた、西欧の模倣に留まらない独自のロシア的心情を色濃く反映させた創作の未来を約束したものであったが、19世紀後半を迎えて続々と登場した若い作曲家たちは彼らの創作意欲を、後に「五人組」と称される作曲家グループに結

集し、作品を相互に批判しつつ、それぞれの豊かな個性を発揮した作曲活動を続けていった。この「五人組」は、バラキレフの強力な指導のもとにその活動を開始したが、1856年セザール・キュイ（当時21歳）、1857年ムソルグスキー（18歳）、1862年ボロディン（29歳）、といった具合に、創作意欲に燃える若い芸術家を続々と結集し、真のロシア国民音楽を目指した作品作りに邁進していった。

リムスキー＝コルサコフがこのグループの門を叩いたのは、ボロディンよりも早い1861年のことだったが、その時17歳という最年少の少年は、すぐにバラキレフの気に入るところとなり、バラキレフは彼を自宅に呼んでは管弦楽法を特訓して鍛え上げた。こうしてリムスキー＝コルサコフは、作曲家としての基礎となる素地を身につけたのだが、「五人組」のメンバーがそれぞれに音楽を専門の職業とするプロフェッショナルではなかったように、海軍一家の出身だったリムスキー＝コルサコフも、12歳の時から兵学校に通っており、音楽は余技という側面ももっていた。事実、1862年には軍艦に乗船して、イギリス、アメリカ、リオデジャネイロ、マルセイユへと至る遠洋航海に参加、作曲のことも忘れて異国の風物の虜となった時期もあるほどである。しかし、帰国後は再びこのグループに復帰、ロシア人としては最初の交響曲となった第1番のシンフォニーを完成させるなど、本格的に作曲活動に力を注いだのである。多くの場合、ディレッタントの域を越えなかった「五人組」の中であって、作曲技法の点で長足の進歩を遂げていた彼は、1871年ペテルブルク音楽院の作曲法と管弦楽法の教授に迎えられるという「五人組」の仲間としては異例のお墨付きをいただくことになるが、それ以降いよいよ創作活動を本格化させるとともに、ムソルグスキーやボロディンらが未完のままに残した作品を補筆するといった仕事も積極的に行い、友情に報いることも忘れていない。また、グラズノフ、リャードフ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフなど、リムスキー＝コルサコフの門下からは錚々たる作曲家たちが輩出されており、教育者としても大きな業績を果たしたといえることができる。

こうした数々の業績を残したリムスキー＝コルサコフの代表作、交響組曲「シェヘラザード」は、1888年の8月7日に完成されたもので、44歳の時のまさに円熟期の作品である。この作品は、日本でも古くから親しまれている「アラビアン・ナイト（千夜一夜物語）」の物語に登場する娘の名前を曲名としたものだが、この娘は「アラビアン・ナイト」の中の「シャリ



アール王と弟シャーザマン王との話」に登場するもので、その娘が語るさまざまなエピソードに靈感を得て、リムスキー＝コルサコフが作曲したものである。

「アラビアン・ナイト」は、アラビア語説話文学の中で、最も多くの外国語に訳され、最も多くの人たちに愛され親しまれている物語である。文庫で約30冊という長大な規模であるが、その第1巻の第1ページにはこう書かれている

「これアラーの御意(みこころ)なり！寛仁にして慈悲深き、アラーの御名において！」

そして、まず序の物語は「シャリアール王と弟シャーザマン王との話」である。



アラビアン・ナイト

シャリアール王とその弟シャーザマンは、ともに稀有の名君として国民の信望を一身に集めていたが、あるとき、シャーザマンは日頃熱愛していた妃が黒人の奴隷に抱かれているところを目撃し、逆上して即座に二人の首をはねてしまった。

彼は傷心のまま兄シャリアール王の国を訪れるが、今度は兄の愛妃がやはり黒人の奴隷と愛欲にふけっているのを見て仰天し、その一件を兄に報告する。怒った兄は弟と同じように、妃と奴隷の首をはねてしまう。シャリアールはそれから毎晩、生娘を迎えては、翌朝必ず首をはねてしまうようになった。かつての名君は、おそるべき暴君に一変してしまったのである。そうした状態が続いたある日のこと、大臣の娘であるシェヘラザードという才色兼備の女性が（ちなみに、村上春樹の「シェエラザード」は似ても似つかない、中年の域に差しかかろうとしていた平凡な主婦だった）妹のドニアザードを伴って参内し、その夜、妹との打ち合わせどおりシャリアール王に面白い物語を聞かせたのである。王は最初、その話にさして興

味を示さなかったが、次第に惹き込まれていき、その続きが聞きたいばかりに、翌朝彼女を殺そうとはしなかった。シェヘラザードの面白い物語はそれから毎晩延々と続き、なんと一千一夜にも及んだ。あれほど女という女を憎悪していたシャリアール王は、次第にシェヘラザードを愛するようになり、彼女を王妃に迎え、それからは以前にも勝る名君として国を統治するようになったという。これが、「アラビアン・ナイト」のそれこそ千分の一にあたる枕の部分の物語である。

リムスキー＝コルサコフは、シェヘラザードの語った物語の中から4つを選んで交響組曲にまとめたが、これらの物語はお互いに関連があるわけではなく、あくまでも別々のエピソードによってできている。しかも、「カレンダー王子の物語」にしても「若い王子と王女」にしても、「アラビアン・ナイト」の中には似かよった話がたくさんあるので、どの物語を指しているのかはわからない。ただ、彼が、それらの多様な話にいたく心を動かされて作曲のペンを執ったということは事実のようだ。

この交響組曲には、全体の内容を暗示する文章が、作曲者自身の手によってこう記されている。

「シャリアール王は、愛していた妃の不貞によって、すべての女性を呪うようになり、妻に迎えた女を一夜を過ごしては殺してしまうことを誓った。しかし、迎えられた娘シェヘラザードは、毎晩、王に興味深い話をして聞かせ、結局千一夜の間生きながらえた。王は、その話の面白さに心惹かれて、殺すのを一日一日と延ばし、とうとうそのむごい誓いを捨ててしまったのである。シェヘラザードが語ったという物語は、世にも不思議な話ばかりで、彼女はその中に詩人たちの言葉や民謡の歌詞を織り交ぜて、一段と興味を惹くようにしたのである」

全曲は「4つの楽章に共通した主題」によって有機的に結びつけられている。リムスキー＝コルサコフは、当初はこの4つの楽章を「前奏曲」「バラード」「アダージョ」「フィナーレ」としか表記せず、表題音楽として発表するつもりはなかったようだが、リヤードフらの強い勧めに負け、結局現在のようなエピソード付きの組曲となったようである。彼は後に、グラズノフに宛てた手紙の中で「やはりあの曲にはエピソードは必要なかったと思う」と書いているが、自伝の中では「このエピソードが曲の理解を手助けするのであれば、それはそれでもいい」とも述べている。

その「4つの楽章に共通した主題」は2つあり、一つは威厳がありしかも荒々しい感じのするシャリアール王の主題、もう一つは、ヴァイオリンのソロで奏される、やさしく愛らしいシェヘラザードの主題である。それぞれの物語の冒頭には、「おお、幸多き王様よ、わたしの聞き及びましたところでは・・・」という前置きの言葉があり、最後は「・・・このときシェヘラザードは、朝の光の近づくのを見てつつましく口を結んだ」という言葉で終わっており、各楽章にあらわれるシェヘラザードの主題は、こうした彼女の前置きと結びを表わしていると言える。

このシェヘラザードの主題はヴァイオリンソロで奏でられ、曲全体で協奏曲のように活躍するが、リムスキー＝コルサコフは前年の作品であるスペイン奇想曲でこの形態を成功させて確信を持ち、この「シェヘラザード」でそれをさらに大きく展開させた。

また、なんといっても魅力なのは、この2つの主題もさることながら、全編をおおっている東洋的な旋律の美しさだ。第2楽章の冒頭でファゴットにより示される主題や、第3楽章の冒頭で弦によって示される流麗な主題は、リムスキー＝コルサコフの全作品の中でも最も美しい旋律の一つだと思う。



### 第1楽章 海とシンドバッドの船

ラルゴ・エ・マエストロ、ホ短調。2分の2拍子の短い序奏から始まる。まず威嚇するかのような力強いシャリアール王の主題が現れ、続いてハーブの伴奏に乗っていかにも美しくなまめかしい魅力を備

えたシェヘラザードの主題がヴァイオリンの独奏で示される。物語の開始である。

主部は、アレグロ・ノン・トロppo、ホ長調。低弦に支えられたシャリアール王の主題があたかも波のうねりを思わせるかのように、ゆったりと幅広く広がっていく。このあたりはリムスキー＝コルサコフが海軍士官として遠洋航海をしていたときの経験がよく活かされていると感じる。クラリネットによる単純な旋律は、船が波をかき分けているような感じであり、フルートが奏でる軽快な旋律は、蒼茫たる海原に生命をかけるシンドバッドの冒険心を表わしているかのようなのである。曲はこの2つの主題を中心に発展し、次第に高潮していったクライマックスを築く。最後は、王と妃の主題が絡み合い、静かに終わる。

### 第2楽章 カレンダー王子の物語

この「カレンダー」というのは、諸国を行脚する遍歴僧のことである。

序奏部は、レント。まず、シェヘラザードの主題が奏されてから、アンダンティーノの主部に入り、ファゴットにユーモラスな感じのする東洋的な主題が表れる。続いて、中間部に入ると表情は一変し、シャリアール王の怒りを表わすかのような荒々しい旋律が表れ、再び最初の旋律が繰り返される。

### 第3楽章 若い王子と王女

アンダンティーノ・クアジ・アレグレット。弦楽器による、流麗な主題から始まる。抒情的な、しっとりとした美しさをたたえた楽章で、いかにも幸せそうな王子と王女の様子が詩的に歌い上げられる。中間部に入ると、クラリネットに快活な舞曲風の主題が顔を出す。そして、再び前の主題が繰り返され、シェヘラザードの主題とともに消えるように終わる。

### 第4楽章 バクダッドの祭り。海。船は青銅の騎士のある岩で難破。終曲

この中の「青銅の騎士の物語」は、シンドバッドの物語とともに童話にまでなっている有名な物語である。この物語は第9夜から始まり、第18夜まで続く”荷担ぎ人足と乙女たちの物語”の中に出てくる片目の托鉢僧の話で、青銅の騎士像の立っている大きな岩に、その近くを航海する船はことごとく吸い寄せられて難破する、という不思議な物語である。曲は、アレグロ・モルトで「話を続けよ」と威嚇するようなシャリアールの主題に始まり、シェヘラザードがおもむろに語りだす。その後、ヴィーヴォの活気

あふれる「バクダッドの祭り」の場面となり、生き活きとしたリズムに乗ってにぎやかな音楽が繰り広げられる。この後、第一楽章の海の情景が再現され、壮絶な難破のシーンが金管楽器を中心とした劇的な音楽で描き出される。やがて興奮は潮がひくように静まっていき、最後は、シェヘラザードの消え入るような旋律にシャリアール王の主題が重なり、静かに余韻を残して結ばれる。



いつの時代も、どんな芸術においても、素晴らしい作品の主人公は男と女。クラシックの名曲も土曜ワイド劇場も同じ。この曲紹介を書きながら改めてそんな思いが心に湧いた。

最後になるが、私が水響に入団して24年目になる。途中、地方勤務だった2年間を除いてほぼすべての演奏会に参加させてもらっている。入団のきっかけはうろ覚えだが、大学オケの卒業文集にあった「将来の展望」という質問に私が「こないだの水響を聴いて、ぜったいオケは続けようと思った」とコメントしたことを受けて、当時の水響の方にお声かけいただいたものと記憶している。大学オケ時代の私にとっての水響は「マニアックでとても難しい曲をやる集団」という印象だった。その印象は今でも大きくは変わっておらず、私が演奏会に招待する方は職場の同僚がほとんどなのだが、だいたいいつも案内の枕詞に「今回も知らない曲ばかりだと思いますが…」という一言がつく。久しぶりにその枕詞が「この曲は聞いたことがあると思いますが…」に変わる演奏会かなと思っている。

ちなみに、前述の「こないだの水響」というのは、1998年夏に行われた第23回定期演奏会で、コープランドのエル・サロン・メヒコ、ラヴェルの左手のピアノ協奏曲、R.シュトラウスのアルプス交響曲というプログラムだったが、田舎出身の吹奏楽育ちの私は3曲とも全く知らなかったものの、圧巻の演奏で鳥肌が立ったことを今でも鮮明に覚えている。時を経て、そんな水響の舞台にメイン曲の演者として立てる喜びをかみしめている。

(家田 恭介)

## チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報が スマホで確認できるようになりました！



演奏会の概要



演奏曲の試聴



チラシ画像



プロモーション動画



楽団からの  
メッセージ



楽団のWebサイト  
SNS

アクセスはこちらから！



スマホのカメラを起動し、こちらのQR  
コードにカメラをかざしてください

Powered by



Orchid

※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源OFFのご協力をお願いしております。休憩中、演奏会終了後にご覧ください。

# アンケートのお願い

本演奏会では新型コロナウイルス感染対策の観点から、アンケート用紙の配布・回収は行いません。

演奏会終了後に今回の演奏会の感想をお聞かせください。

右に記載している URL、もしくは QR コードから  
アンケートフォームにアクセスしてご記入ください。

PC などから

スマートフォンなどから

suikyo.jp



※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源 OFF のご協力をお願いしております。こちらは休憩中や演奏会終了後にご記入ください。

## 水星交響楽団

### 常任指揮者

齊藤 栄一

### コンサートマスター

森 勇人

### ファーストヴァイオリン

新井 侑子  
池田 優太  
伊東 陽子  
織井 奈津乃  
近藤 和  
清水 花凜  
高橋 熙  
田村 奈津子  
土屋 和隆  
西沢 洋  
日比 俊太  
堀田 淳子  
戴野 三音奈  
米嶋 龍昌  
渡部 友賀

### セカンドヴァイオリン

荒金 香帆  
大森 華希  
櫻田 泰斗  
鈴木 紗羅  
◎砂川 湧  
高杉 暁音  
滝澤 蘭  
田代 新  
永井 翠

中野 宏亮  
久光 幹太  
前澤 郁弥  
宮川 妙子  
村部 一星

### ヴィオラ

網中 愉香  
有井 晶  
岡崎 碧  
長田 玲子  
小田中 里奈子  
木村 納  
◎古宇田 凱  
大聖寺 将史  
土屋 哲夫  
平田 拓也  
山口 実

### チェロ

石井 素晴  
大久保 雅子  
◎金澤 直人  
上竹原 修一  
首藤 ひかり  
橘 温子  
原田 大成  
日吉 実緒  
能岡 雅人

### コントラバス

◎石附 鈴之介  
片山 朔杜  
刈田 淳司  
北村 奨也  
壽川 賢太  
長屋 裕大  
和田 輝羽

### フルート

大山 司  
斎藤 美唯  
◎中澤 高師  
本田 洋二

### オーボエ

石井 英久  
菅野 勇斗  
黒川 達郎  
寺田 吉太郎  
◎野口 秀樹

### クラリネット

市村 広奈  
清水 樹土  
馬場園 真吾  
◎藤原 誠明  
前中 悠輔  
横地 篤志

### サクソフォン

中野 明  
日置 武

### ファゴット

伊藤 綾香  
大村 美名  
小田中 優介  
◎冨井 一夫

### ホルン

伊集院 正宗  
大高 直哉  
大山 美佳  
岡本 真哉  
◎島 啓  
清水 颯太  
山崎 智哉

### トランペット

浅田 健二  
家田 恭介  
◎岩瀬 世彦  
金子 恭江  
倉林 佳祐  
神山 優美

### トロンボーン

石井 志歩  
櫻井 統  
佐々木 英王  
◎佐藤 幸宏

### チューバ

植松 隆治

### パーカッション

奥山 千穂  
岸 敦子  
鈴木 日向子  
高橋 淳  
田畑 晶子  
◎椿 康太郎  
山本 勲

### チェレスタ

田頭 英子  
山形 リサ

### ハープ

東森 真紀子  
矢澤 みさ子

◎=パートリーダー

### 本演奏会でご指導いただいたトレーナーの先生方（敬称略）

長田 雅人、阪本 正彦、鈴木 睦、高山 健児、林 憲秀、古野 淳、前田 正彦、三橋 敦、柳澤 崇史

### 水星交響楽団運営委員会

運営委員長：植松 隆治

コンサートマスター：森 勇人

弦インスペクター：刈田 淳司

木管インスペクター：横地 篤志

金管インスペクター：佐藤 幸宏

打楽器インスペクター：山本 勲

楽譜：伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕

ステージ・マネージャー：櫻井 統

会計：浅田 健二、黒川 夏実、砂川 湧

運搬：刈田 淳司

広報・受付：市村 広奈、岡本 真哉、鈴木 牧、土屋 和隆

プログラム制作：伊集院 正宗、伊東 陽子

チケット：古宇田 凱、清水 樹土、砂川 湧

チラシデザイン：水本 紗恵子

### 次回演奏会のご案内

#### 水星交響楽団 第64回定期演奏会

指揮 齊藤 栄一

2022年12月25日（日）12:30 開場 13:30 開演（予定）

すみだトリフォニーホール 大ホール

L.アンダーソン クリスマス・フェスティバル

P.I.チャイコフスキー

バレエ音楽「くるみ割り人形」(全曲)

水星交響楽団ホームページ <https://suikyo.jp>

お問い合わせ [info@suikyo.jp](mailto:info@suikyo.jp)